

「介護職のシーティング支援構築のための基礎研究」

日本社会事業大学 渡辺裕美・ 国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所 廣瀬秀行・
東京都立保健科学大学 木之瀬隆・ ふつうのくらし研究所 吉川和徳・ 鹿児島医療技術専門学校 木下聡美・
しなの森のさと長寿ありがとう 長嶋春佳・ サクラ・コミュニケーションズ 小森由美子・ 昭島市役所 谷津尊子・
埼玉県総合リハビリテーションセンター小山令子・保谷苑 清水麻衣子・足立翔裕園 小峰秋枝・どんぐり山 斉藤友里・
東京老人ホーム 秋葉美穂・けんちの里 桜井孝浩 竹脇朋子・清雅苑 鈴木紀美子 山田麻美・
日本社会事業大学大学院生 有村大士 鈴木朋子 天野由以 三輪秀民・
日本社会事業大学学部生 崔允庭 新橋さち子 秋山裕美

<本報告書の構成>

1. はじめに
2. 研究目的
3. 研究方法
4. 研究結果：シーティング援助の事例報告
 - Aさん
 - Bさん
 - Cさん
 - Dさん
 - Eさん
 - Fさん
 - Gさん
 - (Iさん)
5. 考察：
 - 1 介護職が行うシーティングの知識と技術
 - 2 介護職が行うシーティングをすすめるための支援体制
 - 3 座位移乗をもっと普及させるために
6. おわりに

添付資料

研究協力福祉用具メーカー

座位についての基本知識

CD-ROM「スライディングボードを使った移乗」

平成15年2月22日実施「介護職のためのシーティング研修会」

(第61回シーティングシステム研究会 & やる気介護研究会 共催) プログラムと、参加者アンケート結果

1. はじめに

なぜ縛るのか？車椅子ベルトによる身体拘束をどうすればやめることができるのか？に答えるために、筆者らは、平成13年度に「縛らない介護意識調査」を行い、日本介護福祉学会で「縛らない介護のための特別講座」を企画し、平成14年度は「縛らない介護のための知識と技術を普及するためのインターネット版教科書作成」をすすめる予定である。

これまでの研究で見えてきたことは、「車椅子ベルトは拘束だからやめなさい」と言うだけでは拘束なくならないということだ。現場を変えるためには、実践で「ベルトなしで座る、シーティングはこうすればうまくいく」という方法を見せる必要がある。車椅子ベルトなしで、しかも、すべり座りをさせずに快適に座位保持をする具体的方法について、その現場で成功事例を見せることは、その事例への直接援助であり、その施設の介護職の意識を変える生きた学びの場であるに違いない。

2. 研究目的

本研究の目的は次の5点にある。シーティングに問題を持つ事例を直接援助し問題解決を図ること。介護職のもつべきシーティングに関するアセスメント視点について整理すること。スライディング・ボードやスライディングシート等を使った座位移乗の方法について普及をはかること。座面や背面を支えるクッションや座位保持装置等、福祉用具活用を推進すること。現場の介護職と、シーティングのプロ（特別の教育を受けた理学療法士や作業療法士）と、福祉用具メーカーとのネットワークのあり方を模索すること。

3. 研究方法

1 シーティング援助を要する事例に対する事例研究

1) 研究期間：平成14年9月から平成15年3月

2) 研究対象：シーティングに問題をもつ7事例(A、B、C、D、E、F、G事例)、車椅子にすべり座りをしている事例や痛みを訴える事例や車椅子ベルトをつかっている事例など、特別養護老人ホームの居住事例。別途、施設からスライディングボードによる座位移乗を試したい1事例(I事例)が途中で増えた。

3) 事例を絞り込んだ経過：事例選定にあたって、まず最初に、研究協力施設へ研究内容を説明し、事例の選定を依頼した。当初、事例選定の条件として次のような条件で、1施設あたり1・2事例に絞りこもうと施設と話し合ったが、コミュニケーションが図れる人とする対象が狭まって該当事例を探すのが困難、と言われた。

<当初の事例選定条件>

A要件(次の～のどれかにあてはまる人)に該当する人のうち、コミュニケーションが図れ、研究に協力していただけるような方に対して、座位評価を行い、背もたれがあれば手を離して座れる人を事例対象とする。

安全ベルトを使っている人。

日中、多くの時間を車椅子に座ってすごしている人。

車椅子や椅子に座っていると姿勢がくずれ、斜めに傾いたり、すべり落ちそうになる人。

褥そうがある人、お尻の痛みや不快感を訴える人(もじもじする人)

水や食べものが口に上手に入らないでこぼれることの多い人

そこで、現実的には下記のような条件で事例を探すこととした。

<現実的におこなった事例選定条件>

シーティング援助を必要とする事例(車椅子ベルトを使っている事例や、車椅子にすべり座りのまま一日をすごしている事例や、臀部の痛みを訴えている事例や、体が斜めに倒れてきて手で支えて座っている事例など)、かつ、本人や家族から研究協力への同意を得られる事例

事例数は、当初、1施設1・2事例とする予定であったが、座位保持がうまくいわずに困っている事例が多く示され、結局、1施設から3事例、2つ目の施設から4事例、と7事例を対象とすることとなった。

2 事例研究の具体的な方法

1) どんな事例がどのようなシーティングに関する問題を持っているのか、問題の背景要因を情報収集する。

対象事例からの情報収集 シーティングに関して困っていることや痛み、要望・願いを聞き、本人のベッドから起き上がり座位になり、車椅子へ移乗するまでの一連の動作、座位保持能力（足が床面につく高さのベッドに端座位になってもらって、1両手を離して座れるか、2手で支えて座れるか、3自力で座れないか、の3段階のどのレベルにあるか）プッシュアップができるかどうか、座位姿勢がどうくずれてくるのか、を目の前で行ってもらって動作や座位能力の現状を確認した。

施設職員からの情報収集 介護職のシーティング支援の対象とした理由（どんなことに困っていてどうしたいと思っているか）事例の障害や疾病、座っている時間、姿勢のくずれがどうおこってくるか、現在の介護方法

現在使っている車椅子、クッション、移動方法の確認

座っている姿勢（どう傾きどうずれているのか）写真撮影を行い、客観的データの収集

FSA測定（注 Force Sensitive Applications, カナダの VERG 社が開発した座面圧測定機械。やわらかい表面にどのように圧力がかかっているのかを測定するセンサー入りマットと、パソコンソフトで構成されている。圧がかかっている部分がそれぞれの色で示され、強く圧がかかると赤色になる。）を行い、座面圧が今どのようにかかっているのか、視覚で把握し、測定した。

2) 研究会での事例検討

シーティングのプロ（廣瀬先生、木之瀬先生、吉川先生）と、事例居住施設の理学療法士と介護職員が参加しての事例検討を行った。事例検討では、なぜこのような姿勢のくずれが起こってくるのかをアセスメントし、助言を得ながら、問題解決のための援助計画を立案した。同時に、福祉用具を選定する助言をもらった。

3) 実践および経過観察

シーティングの現状を変えるのに役立つだろうと思われる、新しいクッション・新しい車椅子・新しい椅子などを福祉用具メーカーの協力を得ながら、事例のシーティング援助に有効だろうと思われる新しいクッションや新しい車椅子をレンタルする。どのように生活が変わり、問題解決がされたのか、経過を追いかける。シーティング援助のあり方について評価を行う。

3 現場での指導や研修会

シーティングの知識と技術と、スライディング・ボードやスライディング・シートを使った座位移乗方法についての知識と技術を普及するために、現場での指導や研修会を行う。